2025

HARVARD-YENCHING

INSTITUTE WORKING

PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における
アリスの冒険

AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN

Aoyama Waka | The University of Tokyo

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険
Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

Abstract: These essays are the first drafts of the chapters for an autoethnographic fiction titled *Fustuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual)*, scheduled for publication in 2027. From June 2024 to February 2027, approximately 20 chapters, including a prologue and an epilogue, are planned to be written in Japanese. The work is based on the author's personal experiences and follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese. The story portrays Alice's everyday use of multiple languages. While Japan is often misunderstood as a "monolingual society," the work shows that it is, in fact, a "multilingual society," and it challenges the concepts of "ordinary" and "equality" in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored, with a narrative of homeland loss and regeneration. The work encourages critical reflection on our unawareness of the privilege of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies we live with, aiming to bring out the reader's own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, it seeks to explore the possibilities of creating a socially just world. In order to prepare for the publication of a future English edition and to explore the impossibility of translation, English translations of all chapters are included.

Keywords: Multilingual Japan, Language Use, Being Ordinary/Normal and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

要約：これらのエッセイは、2027 年度に出版予定の『ふつうのマルチリンガル』という自伝的民族誌的フィクション作品の各章の初稿である。2024 年 6 月から 2027 年 2 月にかけて、プロローグ、エピローグを含む約 20 章が日本語で執筆される予定である。本作では、著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が、日常的に多言語を使う様子を描く。日本が「モノリンガル社会」と誤解されがちである一方、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」を言語使用の観点から問い直す。多様性、共生、歴史的加害性、言葉の力をテーマに、故郷喪失と再生を描く。とくに「日本語」や「英語」の特権性や言語的ヒエラルキーに無自覚なわたしたちに対する批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を引き出すことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的公正な世界への可能性を探る一冊である。将来の英語版の出版に備えるために、また翻訳不可能性を探るために、全章の英訳を付す。

キーワード: マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつうと平等主義、歴史的加害性、批判的メタ言語意識

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所
青山和佳

2　矢吹 Yabuki 野犬に食われないよう

森のなかでは、静かに

わたしが三歳だったとき、おとうさんは矢吹で大型トラクターに乗っていた。

矢吹（やぶき）に引っ越したのは、三歳ごろのことだった。じっさいにそこに広がっていたのは水田で、おかあさんが押す、弟のための乳母車のよこにしがみつくようにして立ちのりしながら、あぜみちをしょっちゅう歩いていたはずなのに、深い森に暮らしていたように憶えてしまっている。樹樹はあまりにも高くて、根っこの部分ばかり見ていたのだけれど、そこにはリズミカルに葉を広げるシダや、しっとりと光るコケがびっしりと生えていて吸い込まれてしまいそうだった。植物や土の匂いは雨が降るといっそう強まり、みんなに話しかけずにはいられなかった。すると、シダが、「静かに、野犬に食われないように」、と言う。

弟がひとりで歩けるようになるまで、わたしはひとりでまいにち森に遊びにだされていた。黄色いぼうしをかぶり、黄色い長靴をはいて、ほそい道があれば思いっきり走ってみたり、道からそれて草木を分けながら、ずんずん行進したり、ちょっとした空間をみつけると、顔をあげて両手をひろげてぐるぐる回転したり、ときには鮮やかなオレンジ色をしたユリが咲いているのにおどろいて急停止したりしていた。動きまわってつかれると、森の静けさがそっと包みにやってきてくれる。風のしらべ、小川のせせらぎ、鳥のさえずり、セミやコオロギ、カエルのなきごえ、シカやタヌキのあしおと。こういうとき、シダは、黙って見守っていてくれる。

森のなかでは、お茶を飲んで休んでいる、おそろいの頑丈そうなつなぎを着て、おそろいの頑丈そうな長靴をはいた、お兄さんたちにでくわすことがあった。お兄さんたちは、おとうさんの「がくせい」で、わたしを見かけると、「こんにちは、アリスさん、うさぎに出逢いましたか」ときいてくるので、わたしはきまって、「白うさぎのことですか、三月うさぎのことですか、ピーター・コットンテールのことですか」と、おとうさんに教わったとおりに、すましてこたえることにしていたけれど、このころ、わたしは、「ニホンノウサギ」という野うさぎしか、まだ逢ったことがなかった。忙しそうに跳ねてい

ってしまうので、なかなか話しかけられなかった。

お茶を飲みおえると、「がくせい」さんたちは、スケッチブックに鉛筆で、さらさらとあたりの風景を写しとり、それから、おもちゃの望遠鏡みたいなきかいや、伸びたり縮んだりするひもや、魔法のライトのようなきかいや、硬そうなものたちに手伝われながら、地面のほうを見やったり、遠くの山や木のほうを見やったりして、ノートにどんどん数字をかきつけていく。足もとに生えている草や木や小さな花は、うっかりしゃべって刈られてしまわないように、白く青ざめて、しんとしている。シダが耳もとでささやく。「そくりょう、っていうのだよ、アリス。地図をつくったり、建物をたてたりするために、場所のかたちや大きさを測っているのさ」。

わたしたちの森は、「職業技術者養成所」のなかにあって、おとうさんたちは「中堅技術者」を育てていた。

大きな鳥にさらわれるよう

もうひとつの森は、テレビのなかにあった。「おじいちゃんの温室」の手前に「音楽室」があったのだけれど、楽器はギターとクラリネットくらいしかなくて、そのかわり、たくさんのレコードとレコードプレーヤー、それからテレビが台の上に置かれていた。テレビはふだんまっくらだったけれど、一日に二回、おかあさんがスイッチを入れて、「セサミストリート」という、えいごの番組をみせてくれた。おかあさんは、えいごが苦手なので、わたしがソファに姿勢正しく座っているかどうかを確認したら、いつもどこかに消えてしまった。おとうさんは、たまにやってきて、横に座っていっしょにみることがあった。でも、たいていのときは、ひとりで浸りきっていた。

この森のなかでも、いろいろな生き物と出逢うことができた。とくにお気に入りだったのは、大きな黄色い鳥のビッグバードのほかに、ものすごく不機嫌そうなのに温かみをかんじるオスカー・ザ・グラウチだった。ゴミ缶に住んでいて、アーニーとバートが「こんにちは、何をしているの？」とノックするやいなや、パカーンと蓋をはねあげて登場し、「あのさ、うちは、ウェルカムしないってマットだしてあるだろー」とか、「いま仲間が来ているから、ふだんよりも家のなかをぐちゃぐちゃにして、とんでもなくうまい夕食をつくっているのだよ、とんでもなく臭くていいだろー」などとのたまう。オスカーのおうちに遊びにいって、いっしょに缶のなかで跳ねまわりたかった。

Flying, Flying, Flying という文字が、大空を飛ぶ鳥たちとともに軽快なビートに乗って飛んでいく。プールで子どもたちが泳いでいると何かが追っかけくる。サメかとおもった

ら、Letter F で、全身に Fish Fish Fish という文字をまとっている。わたしもおもわず、Letter F だったのか、と画面のなかの子どもたちといっしょにほっとする。ぽっかりと浮かんだ雲（Cloud）が、遠くのヨットに F〜F〜F〜の文字とともに息を強く吹きかけて、その帆をふくらませて走らせる。近くに寄ってきた鳥にも同じようにしてこんどは鳥を追いやってしまう。流れていった雲はやがて風車をみつけて、同じようにすると、風車がくるくるとまわりはじめる。わたしもおもわず、F〜と温室の Flowers に息を吹きかけてみる。

こうして、わたしは、言葉を食べるように飲み込んでいったのだけれど、そのときに、ビッグバードやオスカーやエルモたちが、おしゃべりするときにおくちをパクパクすることがとてもふしぎだった。しゃべるときにくちをうごかすのはわかるけれど、どうしてこんなにパクパクするのだろう。パクパクしながらしゃべってみると、おなかの底からふとい空気のながれが生まれ、指さきまで温まってきて、なんだか変身しまいそうだった。画面のなかには、たまに、パクパクしないリンダという名前のひともでてきて、手を動かし、顔や頭を動かし、ときには全身を動かして、いろいろなことをお話ししていた。それは、目で見てわかる言葉（Sign）だった。

ミュンヘン、ミュンヘン、ミュンヘン

あるとき、「音楽室」に、大きなお人形さんが入ってきた。ふっくらした深緑色のスカートに明るい緑色のエプロンをかけてリボンを腰のよこに結んで、白いハイソックスを履いている。ぴったりとした半袖のブラウスとベストはどちらも襟が深くくられていて、フリルにふちどられている。ぽかーんとしていると、お人形さんは近づいてきて、わたしを抱きしめ、「アリス、わたしよ、あっこちゃんよ」と言う。だれなのかわからない。あっこちゃんがドイツ留学に旅立っていったとき、わたしはまだ二歳になるかならないかだったからだ。あっこちゃんだというひとは、分厚いめがねをかけていて、お日さまのひかりが窓から入ってきて、めがねのガラスのうえでひかりの粒たちを踊らせていた。

その日から、セサミストリートの歌とはぜんぜんちがう、山や谷を飛びこえるように、声がすごいはやさで高いところにいったり低いところにいったりして、おもわず跳びはねたり、ぐるぐるまわったりせずにはいられないような歌のレコードがかけられるようになった。ヨーレローレロヒホー、ヨヒドゥディヤホホー、ヨーレローレロホヤ、ラヒフリヨー！　わーお、たのしい、たのしい、たのしい。あるとき、コマみたいにぐるぐるまわりながら、さらにテーブルのまわりを大きくまわっていたら、ついに「音楽室」と「おじいちゃんの温室」のあいだにあるガラス窓を突きやぶってしまい、そこに暮らしていたサボテンたちに抱きとめられるはめになった。大さわぎになった。

アリス、ミュンヘンはとってもきれいで、おもしろいところだったのよ。
わたしが好きだったのは、ニンフェンブルグ城っていうお城。
おとぎばなしにでてくるような、素敵なところ。
広いお庭があって、お花がたくさん咲いているの。
お城のなかには、輝くシャンデリアがあって、お部屋はとても豪華なの。
それから、イングリッシュ・ガーデンという大きな公園もあった。
おともだちといっしょに、ピクニックしたり、ボートに乗ったり。
ひとりでいって、川のちかくで、のんびりアイスクリームを食べたこともある。
それから、ミュンヘンには、大きなお祭りもあって。
それから、ミュンヘンには、
それから、ミュンヘンには、

ドイツから持ち帰ってきた本には、人間のからだがどうなっているかが描かれた絵がたくさんあって、からだのなかには、たくさんの大切な場所があって、どんなかたちや色をしているのか、どんなふうにつながっているのか、まるでからだのなかを探検しているみたいに見ることができて、いつまでも眺めていることができた。ときどき、わたしのからだのなかにこんなにいろいろな知らない場所がつまっていて、わたし自身はそこにぜったいに行くことができないことに不思議さと気味の悪さを感じることもあった。なによりも、そこに散りばめられている文字は、わかるようでわからなかった。あっこちゃんが、読みきかせてくれることはなかった。

シダは語る

想像してみて、
二億年、恐竜がいた時代よりもずっと前から、
地球に生えていた、わたしたちは。

土のなかに根を張って、
大地が雨で流されないように居るから、
土のなかの生き物も、たいせつに守られる。

大地に栄養がたまって、
コケや、キノコや、小さな木や、花たちも、
いっしょに、にぎやかに、暮らしていける。

アリス、
おとうさんが乗っているトラクター、
わたしたちには、あれは、あまりに重すぎる。

大地の許しがないのに、
大地を耕すとは、どういうことだろう、
土のなかの空気や水の流れが壊されていく。

アリス、
わたしたちは、押し潰される。
あなたたちも、押し潰される。

それは目にみえない、
それは耳にきこえない、
それは指にふれられない。

あなたが、三十四歳になって、
あなたの、二十六歳になるイトコが、
生きる意味がわからないと自分から消えていく。

そのイトコは、森から遠ざかっていた。
そのイトコは、森から遠ざけられていた。
たましいは、蝶になって森へ還れただろうか。

あなたの頭を撫でる、
あのミュンヘンをいつも想っている叔母の、
あの子どもに起こる未来のことである。

大きなバナナの木のしたで

Unya、もう一回、言わせてね。
オーケイ、deja que yo dice otra vez[1].

---

[1] チャバカノ語(Chavacano)。マレー系言語とスペイン語のクレオール言語。ここでは、とくにフィリピンのミンダナオ島南西部のサンボアンガ市周辺で話されるものをイメージしている。

わたしが三歳だったとき、おとうさんは矢吹で大型トラクターに乗っていた。
Sa dihang lima pa ako ka tuig, nagmaneho akong papa og dako nga traktora sa Yabuki.

おとうさんのことは好きだったけれど、トラクターのことはあまり好きになれなかった。それは、森の景色にけっして溶け込むことはなかったし、あまりにも硬くて落ち葉のように土に朽ちていく様子もなかったから、土のなかの生き物たちと同じ言葉をしゃべることもなさそうで、運転しているおとうさんに手をふりながら、その近くに寄っていくことはなかった。トラクターはさみしそうだったかもしれないけれど、いっしょに遊ぶことができなかった。トラクターが走っている道からそれていくと、おじいちゃんとおばあちゃんが野菜を育てている畑があった。自分たちで土を掘って、そこに種や苗を植えて水やりをして、よしよしよい子だね、と声をかけていた。

ある日、畑にいたら、「ハワイに行くよ」と言われて、どきどきして、あっこちゃんに「ハワイってどこ」ときいたら、地球儀をだしてきて、ひろびろとした海の真ん中あたりの島じまのことだよ、「アメリカ」という国にはたくさんの州があって、そのひとつだよ、と教えてくれた。飛行機に乗って行くのかな、Flying, Flying, Flying、どきどきしていたら、おどろいたことに「ハワイ」まで、家族でドライブしていったのだった。おかあさんが言うには、なんでも福島（ふくしま）にも、おじいちゃんが樺太や芦別で働いていたような炭鉱があって、それが閉じてしまったので、みんなが困らないように、楽しくなるように、つくられた場所らしい。こんこんとお湯が湧きでてくる。

ひっそりとした森でシダたちに見守られながら育っていたわたしは、たくさんのひとが大きなプールで泳いだり、ステージのうえで踊ったりしているのをみて、耳や目が痛くてたまらなかったけれど、黄色い紙でできたレイをかけてもらったときは嬉しかったし、おとうさんと弟といっしょに金色の小さいお風呂にぎゅっとつまって入ったときはワクワクした。なによりもここにも植物がたくさんあることにほっとした。矢吹では出逢ったことのないヤシの木は、背がとても高くて、長いまっすぐなからだを空にむかってぐんと伸ばしていて、てっぺんに大きな葉っぱを広げていた。大きなバナナの木のしたに、たくさんのひとが集まっていて、近づくことができなかった。

矢吹に帰ってきてからも、しばらくはずっと「ハワイ」のことが不思議でたまらなかった。「アメリカ」にあるというのに、あそこは「アメリカ」ではなくて、もういちど、あっこちゃんにきいたら、こんどは日本の地図をだしてきて、「常磐（じょうばん）だよ、ここだよ」と言うし、まったくややこしくてよくわからない。シダにどういうことなの、「ハワイ」はどこにあるの、ときいたら、「アリス、こうこう一年生になったら、なわとびができなくて居のこりさせられたあとに、ひとりで飛行機に乗ってホノルルに

向かって旅立つときがくるから、心配しなくていい」と教えてくれたけれど、「こうこう」ってなんだろう。シダが言う、「日が暮れる前に帰りなさい、静かに、野犬に食われないように」。

Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo
Waka Aoyama

2 Yabuki: Don’t let stray dogs eat you

Be quiet in the forest

When I was three years old, my father was riding a large tractor in Yabuki.

I was about three years old when we moved to Yabuki. I remember walking along the rice paddies, clinging to the side of the baby carriage pushed by my mother for my younger brother. I remember this science as if I were living in a deep forest. The trees were so tall that all I could see were their roots, but there were ferns spreading their leaves rhythmically and mosses glistening so thickly that I felt as if I were being sucked in. The smell of the plants and soil was heightened by the rain, and I couldn't help but talk to every life around me. Ferns told me to be quiet so that I would not be eaten by stray dogs.

Until my brother was able to walk by himself, I was sent out to play in the forest by myself all the time. Wearing a yellow hat and yellow boots, I would run as fast as I could along the narrow paths, or march along the paths, weaving my way through the vegetation, and when I found a small space, I would raise my head, open my arms, and spin in circles, sometimes stopping suddenly in surprise at a bright orange lily in bloom. Whenever I got caught moving around, the silence of the forest would gently envelop me. The sound of the wind, the murmur of the stream, the chirping of birds, the cicadas and crickets, the croaking of frogs, and the footsteps of deer and raccoons. In these moments, the ferns silently watch over me.

In the forest, I would often run into a group of young men, wearing matching sturdy-looking jackets and sturdy-looking boots, who were resting and drinking tea. They were my father's "students," and when they saw me, they would ask, "Hello, Alice, have you met a rabbit?” I always responded in the same casual manner my father had taught me: "Are you talking about the white hare, the March hare, or the Peter Cottontail? ” In truth, the only wild rabbit I had ever encountered was the Japanese hare. I could not talk to them because they were too busy hopping around.

After finishing their tea, the "students" took a pencil and a sketchbook and made a quick sketch of the surrounding scenery, then looked at the ground and at the mountains and trees in the distance with the help of a toy-like telescope, a string that stretches and shrinks, a machine that looks like a magic light, and other hard-looking objects, and made numbers in their notebooks. The grass, trees, and small flowers growing underfoot are white, pale, and still, lest they be accidentally mowed down by the students. Ferns whisper in my ear. It's called surveying, Alice. They measure the shape and size of places for mapping and building.

Our forest was in a "Vocational Engineering Training School" where my father and his colleagues as instructors would train "mid-level engineers".

Let the Big Bird take you away

The other forest was in the TV. There was a "music room" in front of Grandpa's greenhouse, but there were only guitars and clarinets, and instead there were many records, a record player, and a TV on a stand. The TV was usually off, but twice a day, Mom would turn it on and show me an English program called "Sesame Street". She was not very good at English, so she would make sure I was sitting properly on the couch, and then she would disappear. Sometimes my father would come and sit beside me and watch with me. But most of the time, I was immersed in the show by myself.

In this forest I met a variety of creatures. My favorites were Oscar the Grouch, a very grumpy but warm looking creature, and Big Bird, a big yellow bird. Oscar lived in a garbage can. When Ernie and Bert would knock on the can and say, "Hello, what are you doing?" He would immediately say something like, "Well, you know, I have a mat that says I don't welcome people in my house," or, "I'm having friends over, so we're making a bigger mess than usual and cooking an outrageously good dinner. It smells so bad, doesn't it? "I wanted to go to Oscar's house and jump in the can with him.

The words "Flying, Flying, Flying" fly on a light beat with birds flying in the sky. When the children are swimming in the pool, something is chasing them. I thought it was a shark, but it was the letter F with the words "Fish, Fish, Fish" all over its body. I was relieved, along with the children on the screen, to see that it was a letter F. A cloud floating in the distance blows hard on the sailboat with the letters F~F~F~F~F~, causing its sails to puff up and run. It does the same to a bird that comes near, and the bird is chased away. The clouds that

had drifted away eventually found a windmill, and when they did the same, the windmill began to spin. I also blow on the flowers in the greenhouse with an "F".

I always wondered why Big Bird, Oscar, and Elmo's mouths opened wide when they spoke. I could see that they moved their mouths to speak, but I wondered why they moved their mouths so much. When I moved my mouth like that, air came out of the bottom of my stomach, my fingertips got warm, and I felt like I was changing. Sometimes a character named Linda would appear on the screen, and she wouldn't move her mouth or make any noise when she spoke, but she would move her hands, her face, her head, and sometimes her whole body to talk about different things. It was a language you could see with your eyes (sign language).

Munich, Munich, Munich

One day, a large doll came into the "music room". She wore a puffy dark green skirt, a bright green apron with a ribbon tied across her waist, and white high socks. Her tight-fitting short-sleeved blouse and vest both had deep collars and were ruffled. As I stood there blankly, the doll approached me, hugged me, and said, "Alice, it's me, Akko-chan." I don't know who she is. I was only two years old or younger when Akko-chan left for Germany to study. She was wearing thick glasses, and when the sun's rays came through the window, they made the light particles dance on the lens of her glasses.

From that day on, they started playing records of songs that were so different from Sesame Street songs that one could not help but jump up and down and spin in circles as if jumping over mountains and valleys, their voices going high and low at such a rapid pace. ヨーレローレロヒホー、ヨヒドゥディヤホホー、ヨーレローレロホヤ、ラヒフリヨー！ Wow, it's fun, fun, fun! One day, while spinning around like a top, I spun around the table even more and finally broke through the glass window between the music room and grandpa's greenhouse, and was caught by a cactus growing there and saved. There was a big commotion.

Alice, Munich was a very beautiful and interesting place.
My favorite castle was Nymphenburg Castle.
It's a lovely place, like something out of a fairy tale.
They have a big garden and lots of flowers.
Inside the castle, there are shining chandeliers and the rooms are very luxurious.

Then there was a large park called the English Garden.
Picnics and boat rides with friends.
I once went there alone and had a relaxing ice cream near the river.
Also, Munich has a big festival.
Also, Munich has this……
Also, Munich has that……

In the book Akko-chan brought back from Germany, there were many pictures showing how the human body works, and I could see many important places on the body, what shapes and colors they have, how they are connected, as if I were exploring the inside of the body. I could look at them forever. Sometimes I felt strange and weird that there were so many unknown places in my body and that I could never go there myself. Especially the letters scattered around were incomprehensible to me, even though I seemed to understand them. Akko-chan never read them to me.

The Ferns Speak

Imagine,
200 million years, long before the time of the dinosaurs,
We were growing on the earth.

Rooted in the soil,
We are here so that the earth won't be washed away by the rain,
The creatures in the soil are also carefully protected.

Nutrients accumulate in the earth,
Moss, mushrooms, small trees, and flowers,
We can live together in a lively atmosphere.

Alice,
The tractor that Dad rides,
It is too heavy for us.

Even though the earth does not allow it,
What does it mean to cultivate the earth?
The flow of air and water in the soil is destroyed.

Alice,
We are crushed.
You will be crushed, too.

It cannot be seen,
It cannot be heard,
It cannot be touched.

When you become thirty-four years old,
Your twenty-six years old cousin takes her own life,
Not knowing the meaning of life.

Your cousin was far away from the forest.
Your cousin was kept away from the forest.
We wonder if her soul could return to the forest as a butterfly.

This is what will happen to a daughter of your aunt,
Who gently strokes your head, and
Who forever immersed in memories of Munich.

Under the spreading banana tree

Unya, let me say it one more time.
Okay, deja que yo dice otra vez .[2]

When I was three years old, my father was riding a large tractor in Yabuki.
Sa dihang lima pa ako ka tuig, nagmaneho akong papa og dako nga traktora sa Yabuki.

I liked my dad, but I didn't really like the tractor. It never seemed to blend in with the forest landscape, and it was so hard that it did not seem to decay into the soil like a fallen leaf, so it did not seem to speak the same language as the creatures in the soil. The tractor might have seemed lonely, but I could not play with it. As I turned away from the road where the

[2] Chavacano (Chavacano). A creole language of Malay and Spanish origin. Here, we are particularly interested in the one spoken in and around Zamboanga City in southwestern Mindanao, Philippines.

tractor was running, I found a field where Grandpa and Grandma were growing vegetables. They dug out the soil, planted seeds and seedlings, watered the plants, and said, "Our babies, sweet babies."

One day, when I was in the field, she told me that we were going to "Hawaii". I was very excited and asked Akko-chan where Hawaii was. She pulled out a globe and told me that it was an island in the middle of the vast ocean, and that it was one of the many states in the country called "America". I wondered if we were going by plane, flying, flying, flying, but to my surprise, we were driving to "Hawaii" as a family. My mother told me that there was a coal mine in Fukushima, just like the ones my grandfather had worked at in Karafuto and Ashibetsu, but that it had closed, so they had built this place so that everyone would be alright with new jobs and people would come and have fun. Even after the mine's closure, hot springs continue to emerge in the area.

Growing up in a secluded forest watched over by ferns, my ears and eyes ached when I saw so many people swimming in the big pool or dancing on the stage, but I was happy when they put yellow paper leis on me. I was thrilled to be able to take a bath in a small golden bathtub with my father and brother. Above all, I was relieved to see that there were many plants here as well. The palm trees, which we had never seen before in Yabuki, were very tall, with their long, straight bodies reaching skyward, and large leaves spreading out at the top. There were so many people gathered at the bottom of the big banana tree that I could not get close to it.

After returning to Yabuki, I kept wondering about "Hawaii" for a while. When I asked Akko-chan again, she brought out a map of Japan and said, "It's in Joban, here. When I asked the ferns what she meant and where "Hawaii" was, they told me, "Alice, one day when you are a "kōkō ichinensei", you cannot jump rope in PE and they will make you stay after school, and then you will get on a plane and leave for Honolulu by yourself. But what does "kōkō ichinensei"[3] mean? The ferns say, "Go home before dark, be quiet, and don't let the stray dogs eat you.

[3] "Kōkō ichinensei" refers to a first-year high school student in Japan.